

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00410

研究課題名(和文) 英国における「ロウワー・ミドル・クラス」と「郊外」の表象

研究課題名(英文) Representations of the 'lower middle class' and 'suburbia' in Britain

研究代表者

新井 潤美 (Arai, Megumi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：70222726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：英国の文学、文化における「ロウワー・ミドル・クラス」の表象を、19世紀から現代までたどることによって、「ロウワー・ミドル・クラス」という、英国においても依然として曖昧で不透明な概念がどのようにして作られ、そのステレオタイプが発展したかを考察した。特に19世紀後半にその数が急増し、存在感が大きくなった都市部の「事務員」、彼らの住宅地として19世紀後半に開発が進んだ郊外住宅地について、そのイメージとステレオタイプを小説、戯曲、随筆、各種映像表象を分析し、「ロウワー・ミドル・クラス」表象が英国の文化、階級観において持つ意味、現在の英国の文化とアイデンティティの中で占める位置を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英国における「ミドル・クラス」のイメージと実体については研究がなされてきた。しかし、本研究ではこれまであまり取り上げられなかった「ロウワー・ミドル・クラス」に焦点を当て、その実体が依然として漠然としていることについて、新たに勢力を増して存在感を大きくしたロウワー・ミドル・クラスがアッパー・クラスやアッパー・ミドル・クラスをどのように脅かしていったか、そして諷刺、揶揄、非難の対象となったかを考察した。さらに「ロウワー・ミドル・クラス」と関連の深い「郊外(サバービア)」という住宅地の表象を考察することによって、英国文学、文化における「階級」の概念についての新たな理解に貢献する試みである。

研究成果の概要(英文)：The research focused on the birth and development of the concept and stereotype of the 'lower middle class' and 'suburbia' in British literature and culture. By analyzing literary and cultural material such as novels, plays, essays, various types of journalistic writing, and visual material such as films and television drama, the researcher attempted to shed light on the nebulous and ambiguous image of the 'lower middle class', and show how the understanding of the various representations and stereotypes of the 'lower middle class' and 'suburbia' can contribute to the understanding of British culture and sense of identity as a whole.

研究分野：英文学

キーワード：階級意識 郊外 ロウワー・ミドル・クラス ステレオタイプ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「ミドル・クラス」そのものについては、そのイメージ、歴史、興隆、文化、教育、住居など、様々な視点から扱った文献が存在するが、19世紀後半以降の小説や演劇、そして文芸雑誌などに主に揶揄や諷刺の対象として、時には同情や侮蔑、あるいは脅威的存在として、様々に描かれる「ロウワー・ミドル・クラス」については、その実体についても、ステレオタイプや表象についても論じた文献が多くないことがこのテーマを扱いきっかけとなった。

2. 研究の目的

本研究では曖昧で多様な「ロウワー・ミドル・クラス」のイメージについて、英国の文学および文化における様々な表象を分析することによって、新たに勢力を増してその存在感を大きくしていったロウワー・ミドル・クラスがアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスをどのように脅かしていったか、そして彼らが諷刺、揶揄、非難の対象となっていたかを考察し、「ロウワー・ミドル・クラス」とその表象が英国文学、文化の理解において重要な要素であることを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 「ロウワー・ミドル・クラス」について、その実体と表象を分析し、彼らについてのイメージとステレオタイプがどのようにして作られていったかをたどる。
- (2) 19世紀後半にその数が急増し、存在感が大きくなっていった、「ロウワー・ミドル・クラス」の典型的な人物、「事務員」(clerk)の様々な表象をとりあげ、彼らのイメージがアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスにとっての喜劇的な存在、諷刺の対象となっていく過程を考察する。そしてこういった喜劇的なイメージが、ロウワー・ミドル・クラス出身の作家たちによっていかに脱喜劇化されていったかを、文学作品を中心に見ていく。
- (3) ロウワー・ミドル・クラスをミドル・クラスとならしむ「教育」について、英国において「教育」が何を意味するか、「教養を身につける」ことの含意とスティグマについて、英国のアッパー・クラスとアッパー・ミドル・クラスの伝統的な教育施設の「パブリック・スクール」の誕生と発展、そのイメージの定着を辿りながら考察する。
- (4) ロウワー・ミドル・クラスとの関連が最も強い、「郊外」について、そのイメージとステレオタイプを追っていく。
- (5) 「ロウワー・ミドル・クラス」の英国文化における意味をまとめると共に、それが現在のイギリスの文化とアイデンティティにおいてどのような位置を占めるのかを考察する。

4. 研究成果

- (1) 英国における「ロウワー・ミドル・クラス」表象について、19世紀以降の英国の小説、戯曲、随筆、映像資料を分析することによって、その表象の多様性が改めて認識できるとともに、住居地である「郊外(サバービア)」だけでなく、「レジャー」、「旅行」、「飲食」、「言葉」などの様々な表象における分析結果を出版物および学会での口頭発表としてまとめることができた。特に最近の英国においてそれまでタブー視されていたと言ってもよい「ロウワー・ミドル・クラス」という表現が、マスコミなどの媒体で以前よりも使われるようになり、それまで周縁的な存在であった「ロウワー・ミドル・クラス」が今や英国におけるマジョリティであるという認識も確認できた。同時に、19世紀以降のステレオタイプやイメージの影響は根強く、この階級のイメージと実体の複雑な関係や矛盾についてさらなる研究の必要を確認した。
- (2) 出版物としては2021年と2022年にそれぞれ研究成果を単行本としてまとめた。2021年に白水社から出版された『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』は主なテーマとして英国における「上流階級」の表象を扱っているが、「上流階級」のイメージ、ステレオタイプがどのように形成され、英国文化の重要な要素となっているかを考察することによって、このようなイメージ形成が「ミドル・クラス」によって主になされていることを明らかにすると共に、「ロウワー・ミドル・クラス」的」とされる多くのことがら、実は「アッパー・クラス」から始まり、だんだんと社会的階級を下ってきたことも本書で指摘している。この著書は2022年に韓国において翻訳、出版されている。さらに、2022年には講談社から『英語の階級 執事は「上流の英語」を話すのか?』を出版した。本書では題名のとおり、英語のアクセント、語彙、決まり文句などにおける「階級」の要素を分析し、「ロウワー・ミドル・クラス」の英語と見なされているものを考察して、それが「アッパー・クラス」と「ワーキング・クラス」の英語とそれぞれどのような関係にあるかを明らかにした。本書は2023年にはオーディオブック化され、その英語の部分は様々な階級のアクセントを再現することができる英国の俳優が担当したことによって、日本国内でも、英語の階級とアクセントの関係がより明快に伝えることができたと思われる。

(3)論文「Janeitesの功罪—Jane Austen 受容についての考察」、『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター) 第33号(2020年)では、英国の小説家 Jane Austen の作品の受容を分析し、最初はアッパー・ミドル・クラスの知識人による評価が中心だった彼女の作品が20世紀後半における作品の映像アダプテーションの影響による、「教養」の大衆化とも言えるプロセスを経てその受容が広がっていた過程を考察した。

(3) 口頭発表では日本国内の19世紀イギリス文学合同研究会準備大会シンポジウム「現代を生きる19世紀イギリスの作家たち」において、「『The Young Gentleman』-チャールズ・ディケンズと「階級」」と題した発表で、19世紀の小説家で、自分自身がロウワー・ミドル・クラス出身の小説家 Charles Dickens をとりあげ、彼の階級意識とコンプレックス、そしてヴィクトリア朝における階級観と偏見を、Dickens の小説 *David Copperfield* と、Dickens の友人 John Forster による Dickens の伝記の、主に幼少時の部分を考察することによって明らかにしようと試みた。同じテーマをさらに掘り下げた英語による発表「“To Be the Hero of My Own Life”: Charles Dickens and the Portrait of the Author」はハイブリッドで行った国際シンポジウム The Power of Words: Joint Symposium 2022 の一部である。Dickens が自伝的要素を書き込んだ *David Copperfield* において、主人公 David の社会的階級をアッパー・ミドル・クラスに設定することによって自己イメージの「紳士化」を図ったが、彼の死後に出た Forster による伝記におけるある記述によって、それがいわば逆効果になった過程を分析した。この発表はさらに「自己イメージと階級表象」についてのフロアとの議論に発展した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 新井潤美 | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 Janeitesの功罪－Jane Austen 受容についての考察 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『文化交流研究』 | 6. 最初と最後の頁 65 - 70 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 新井潤美 |
| 2. 発表標題 「『The Young Gentleman』;チャールズ・ディケンズと「階級」」 |
| 3. 学会等名 19世紀イギリス文学合同研究会準備大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 新井潤美 |
| 2. 発表標題 大石和欣『家のイングランドー変貌する社会と建築物の詩学』について |
| 3. 学会等名 都市史学会ダブリン研究ワーキンググループ（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Megumi Arai |
| 2. 発表標題 '"To Be the Hero of My Own Life": Charles Dickens and the Portrait of the Author' |
| 3. 学会等名 The Power of Words: Joint Symposium 2022（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 新井潤美 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 白水社 | 5. 総ページ数 235 |
| 3. 書名 『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』 | |

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 新井潤美 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 講談社 | 5. 総ページ数 201 |
| 3. 書名 『英語の階級－執事は「上流の英語」を話すのか?』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|